

芸術系大学シラバスのアーカイブ

2022 年度活動報告

本研究プロジェクトは 2022 年度より新たに開始したものであり、初年度の報告である本稿では、まず実施に至る契機、およびその狙いを示す。

大学入学時に配布される分厚い授業内容リストである印刷されたシラバスとにらめっこしながら履修する授業を選んでいくという光景は過去となりつつある。大学からの配布物のなかでもそれなりの重量を占めるシラバスは、前期後期の授業選択の瞬間こそにらめっこよろしく詳細に見られるが、それ以外に読まれることは少なく、新年度の新たなシラバスが到着するとともに忘れられ、個人レベルでは廃棄されてしまうことが多い。文書保管・アーカイブの観点からすると、大学シラバスの位置づけが難しい。筆者は別大学にて教育史調査の一環としてシラバスの保存状況を調べたことがある。大学全体での規定はあるものの、各部局で自主的に保存していたり、スペースの関係で破棄されていたりすることがあった。いずれも「なんとなく大事そうだからとっておく」が「多分他のところでも保存している」ので廃棄の可能性がある、あるいは実際に廃棄されていたという状況であった。近年では履修登録のオンライン化が定着し、シラバスもウェブ上で他大学分も含め参照できるようになっている一方で、当該年度を過ぎたシラバスについては非公開となるなど、かならずしもアクセスがしやすくなったとは言い難い。これは年度更新されるようなドキュメントに共通の課題ともいえる。

一方でシラバスは授業内容だけでなく、大学の教育・研究方針、望ましい学生像など、受験生、在学生、そして社会に対してのいわばステートメントが含まれる場合もある。芸術系大学における学生の教育とはどのようなものか、という共通理解がとれているかの判断は、特に外野からは難しい。参考として、日本学術会議が「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準」を分野別に公開しており、芸術関連では哲学分野で美学芸術学について言及されているなどしているが、制作を中心とした内容については現時点でも公表されておらず、共通認識の共有の難しさが伺える。シラバスという限定された内容ではあるが、その歴史的変遷などを後年チェックし、芸術の教育研究とはどういうものかという問いに対する資料が必要であろう。以上の観点から、その基礎資料作成としてアーカイブ作業を本プロジェクトとして実施することとした。

本年度は初年度ということで、全体の調査・研究を実施するための状況把握がメインとなった。まず事前調査もふくめ京都市立芸術大学におけるシラバスの残存状況確認の調査を行った。2023 年のキャンパス移転に伴い様々な資料の整理が行われており、その中で事前調査で確認できていたものが移動・箱詰めされていたケースがあった。芸資研に一部シラバスが引き取られており、アーカイブ作業は作業スペースも考慮して芸資研の撮影スペースにて行うこととした。将来のアーカイブ公開およびそれを用いた研究利用を念頭に入れ、OCR によるテキスト化に耐えられる画像解像度を設定した。年度末にむけて学生補助による撮影を実施する予定である。作業量から次年度以降も断続的に実施予定である。

京都市立芸大のシラバス調査と並行して、国内の各芸大におけるシラバスの調査、教育方針に関するドキュメントの調査も行っている。本年度はディプロマポリシー・望む学生像といった部分に絞って、現在公開されているものの情報収集を行っている。得られたデータは計量テキスト分析などを用い、芸術教育における先行研究との比較分析を実施、まとめる予定である。簡易的に分析した内容からは、地域性についての言及が複数あるなど、必ずしも教育研究の観点に限定されない視点も伺え、翻ってステートメントとしての教育研究理念が表出しているともいえる。また、シラバスなどの保存規定について、芸術系以外の大学も含めて情報収集を実施している。概ね 5 年程度の保存義務を課していることが判明しているが、担当部局、その後の処理に関しては明示されているとは限らず、引き続き調査が必要である。

2023 年度も引き続き申請・実施予定であるが、キャンパス移転に伴い撮影の実施場所が確保可能か、また資料が手に届きやすい状況になるかは不透明であるため、芸資研スタッフと密に連携を取って実施したい。また、シラバスに直接影響を受ける学生の助力も必要であるが、年度後半、とくに年末年始をはさんだ時期は本学学生が作品制作に時間を割く時期であり、プロジェクト資金支給の決定タイミングと実施計画についてあらかじめ織り込んだうえでの実行を図りたい。

KH Coder を用いて共起ネットワークを表示させた。

なお、簡易的に行ったものであり、今後改定されるものであることに注意されたい。